

2. 「笹森儀助と朝鮮における教育活動」

松田修一（東奥日報社会部長）

【座長】 どうもありがとうございました。では引き続きまして松田修一先生です。松田先生は現在青森県にございます東奥日報の社会部の部長であります。今年の7月の下旬にわれわれ記念センターのほうは山田良政・純三郎兄弟が津軽出身であるということで、弘前で山田兄弟を中心とした講演会と展示会を催しました。松田先生は同じく弘前が生んだ笹森儀助の軌跡を丁寧に追いかけた連載記事を東奥日報に長期にわたって連載され、笹森儀助が朝鮮における東亜同文会経営の城津学堂の校長だったことから、東亜同文会との接点ができ、記念センターへ来訪されたこともございます。そういうこともあり、松田先生には笹森を通して朝鮮における東亜同文会の学校経営のお話をしてほしいとお願いいたしました。それではよろしくお願いいたします。

【松田】 松田です。どうぞよろしくお願いいたします。東奥日報という新聞社名は初めて聞かれたという方がほとんどだと思います。電話でもよく「東奥日報さんですか」と聞かれることも多いぐらいです。余談ですが、東亜同文会の東亜と、偶然重なってます。東奥日報は、青森県の地方紙でして、私が今ここにいるのは、笹森儀助という、東亜同文会が朝鮮半島の北東部に開設した城津学堂の校長をされた人の評伝を、2年半以上にわたって東奥日報に連載させていただいたためです。私は申し上げるまでもなく学者ではございません。また、旧韓国における東亜同文会の教育活動に関する研究は、九州大学に稲葉継雄先生という大変立派な先生がいらっしゃるしまして、実はかなりの論文、著作を出しておいでですので、そちらをご覧になっていただいた方が極めて正確で学術的なことがお分かりになるかと思えます。今日

私は、稲葉先生の研究成果を下敷きに面白い事を話すという程度ですので、予めお断り申し上げておきたいと思えます。

さて笹森儀助という名前も、おそらく聞いたことがあるという人はそれほど多くはないのではないかと思います。一番有名なのは写真です。単の浴衣のような着物を尻っぱしよりにして、草鞋を履き、首からクバの葉で作った沖繩独特の団扇を下げて、なぜかそれにコウモリ傘をさしているという珍妙な写真が残っておりまして、雑誌『太陽』等の表紙になったりしたこともあります。おそらく探検家の写真としては最も有名な写真ではないかと思います。その写真をご覧になれば「ああこの人か」というふうに思われる方もいるかも知れません。そういう意味で探検家として知られている人なんですけれども、明治32年5月、朝鮮半島の北東部、現在の北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の城津に東亜同文会の日語学校を開設するために渡ったわけです。

校長として行った割には、7月13日に城津に着任して一ヶ月も経たない8月6日に、早くも韓国、中国、ロシアの3国国境地帯、図們江（朝鮮語では豆満江）が日本海に注ぐ、あの辺りの探検に行きます。これは9日間だけでしたが、さらに9月2日から22日まで今度はウラジオストックからハバロフスクの方まで足を伸ばします。その報告が『西伯利亚旅行日記』という本になっておりますので、探せばご覧になることもできます。その旅行が20日間で、この時期は実は城津学堂を開設するのに最も忙しい時期だったわけです。開校式は10月5日。地元の名士を集めて盛大に行なわれましたけれども、この開校式のわずか4日後、10月9日から再び三国国境地帯の調査に出かける。今度は34日間という長い期間です。



さらに明治33年に鏡城というところに学校を移すための調査も行なっています。そして10月の19日から29日までまたまた国境地帯を調査しています。

このような状態でしたから稲葉先生は『東亜同文会の韓国における教育活動』という著書の中で、「笹森の本業は校務よりはむしろ清・韓・露の国境地帯や満洲沿海地区の状況視察にあったようである」と指摘しています。また『近衛篤磨日記』の中に、「参謀本部陸地測量部員笹森儀助」という表記が出てくることを挙げて、「笹森は、教育者としての鏡城学堂長であると同時に参謀本部陸地測量部員も務めていたのである」と述べています。

ちょっと話が飛びますけれども、今月の8日、弊社から『笹森儀助書簡集』が発刊されます。これは弘前の笹森家に残されていた519点の書簡等を活字に起こしたもので、東亜同文会、朝鮮に関わる書簡もたくさん含まれています。東亜同文会の朝鮮における教育に関する資料は極めて限られておまして、久々の新資料ということになるかと思えます。その中には陸羯南の手紙も含まれております。羯南は東亜同文会の初代幹事長ですので皆さんご存じかと思いますが、新聞『日本』を主宰された方で、笹森の家から100メートル足らずの同じ町内に生まれました。その人の明治32年10月3日の書簡が伊藤伊吉なる人物、朝鮮に居た在留邦人だと思えますが、その人の話として、「学校之方モ端緒相開候上ハ、兎角一応御帰朝可然存候」と書いています。笹森に帰国を勧めているわけです。城津学堂の開校するちょうど2日前の手紙で、実は笹森を校長に推薦したのはこの陸羯南なんですけれども、推薦した本人が開校直前に帰ってこいと勧めている。そういうふうに帰国を勧めている人は他にも何人かおまして、先ほど申し上げた『笹森儀助書簡集』の総合解説を書かれた河西英通広島大学教授が、「笹森の役割は日本語学校を開校すること、そのことにこそあつ

たようである」と指摘しております。

これは正しい指摘だと思うんですけども、ただ私が思うには、もう1つは開校すること自体が非常に困難な場所であった。それと、笹森はすでに55歳になっていたわけです。あそこはご存じのように大変寒さの厳しいところで、笹森が東亜同文会で明治34年4月に行った講演だったと思いますけれども、冬にあまり寒くて鶏が何羽も死んでしまったという話が出てくるぐらい寒いところですので、体をいたわって早く帰ってこいと言ったのかな、難しい開校の仕事が済んだらもういいんじゃないか、そういうふうなことだったと思います。

ここまで散々探検ばかりしていたという話をしてきました。実際に、笹森は探検家というふうには今までは捉えられているわけですが、実は2年ほど前に土曜日の夜9時から、日立がスポンサーをしている「世界ふしぎ発見」というテレビ番組で笹森儀助の特集をやったことがあります。その時私はアドバイザーのようなことをさせていただいたんですが、その時に予め台本が来て、副題に「明治の豪傑」などと付いているんです。台本を読むと西表島やトカラ列島を探検してこいつはすごい男、とそういうふうな書き方になっていたわけですが、私はそこでちょっと「これまずいですよ」と進言しました。確かに笹森は探検家であるけれどもただの探検家ではない、という話をさせていただいたんですが、それはどういうことかということをこれからちょっと申し上げたいと思います。

話は前に戻りますが、笹森はどういう人かを分かり易くするためにちょっと笹森の生涯を振り返ってみたいと思います。お手元に詳しい経歴をお渡ししておりますけれども、かいつまんで申し上げます。笹森が生まれたのは青森県の弘前市。山田兄弟の家と背中合わせぐらいのところに住んでおりました。ここでもまた弘前と東亜同文会の縁が出てくるわけですが、生まれたのは1845年

(弘化2年)。150石取りですから田舎の弘前藩としては中の上ぐらいです。1867年(慶応3年)に弘前藩の最後の藩主・津軽承昭の机の上に国政改革の意見書を置いて永蟄居に処されます。維新の大赦によってそれが解けたのが明治3年(1870年)ですから、武士でありながら肝心の明治維新の時に何もできないで家に押し込められていたということになります。

そのあと下北半島の大区長をはじめ青森県内で役人として活躍します。明治14年に中津軽郡長を自ら辞任しまして岩木山の麓に農牧社という洋式牧場を開きます。中津軽郡の弘前は当時、青森県で最も人口が多く、旧武士の影響が大きく、政治的な中心であったわけで、そのの長というのは国から派遣された県庁役人を除くと県内で一、二を争う政治行政官です。その地位をポイと捨てて、没落士族救済のための牧場を開きます。その牧場の東京支店を明治19年、東京芝に開きました。これは青森県の企業の東京進出第1号です。そこで店の経営にあたっているうちに、明治23年に第1回帝国議会が開かれ、連日傍聴した笹森は、地租引き下げ論をめぐる民党が政権を奪おうとして国民不在の論議を繰り広げているということに失望を抱き、憤慨し、明治24年の春に西日本一周の旅に出ます。地租改正論が実態に合っているかどうかということを目で確かめることが目的でした。これが彼の本格的な探検の第一歩ということになるわけです。

翌年、今度は千島探検に出発し、カムチャッカ半島のすぐ手前まで行きます。ロシアの軍備を見るのが主な目的でした。結果を『千島探検』に著し、それを見た井上馨外務大臣が南西諸島の調査を依頼します。その調査の紀行記『南島探検』というのが笹森儀助を最も有名にしているわけで、先ほどお話しした珍妙な写真はそのときのものです。糖業の実態を探ってくれという依頼だったんですけれども、その依頼の範囲を遙かに超えて、有名な酷税と言われている人頭税や、マラリアに

苦しむ沖縄の人々の生活・文化・国防など、あらゆる分野について詳細を極める調査を行ないまして、それが二百数十年に及ぶ人頭税の廃止に影響を与えたということと、それから柳田国男に南島談話会の結成を促したということで民俗学の嚆矢とも言われています。

さらに『南島探検』を読んだ井上馨が笹森に、今度は奄美大島の島司、今のトカラ列島から沖永良部島までの郡長のような職を委嘱するわけです。そこで薩摩による黒糖搾取で生じた莫大な負債に苦しみ、「東洋のアイランド」とまで呼ばれた奄美の島民の救済にあたるわけです。最後には薩摩方との軋轢によって、結局は辞任に追い込まれます。負債を解消する目処が立ったということもありまして島司を辞め、今度は東亜同文会の日語学校を開設するために旧韓国に渡った。戻ってくるのは明治34年です。その後、明治35年から1年半、第2代青森市長を務めております。

よくよく考えてみるといろんなことをやっていて、この人はどういう人なのか、一貫性がないんじゃないかと思われるかも知れません。実はそうでもないんですが。この人の一番有名なところは探検だったので、東亜同文会の学堂長というのもちょっと唐突な気がしますが、その理由についてちょっとお話ししたいと思います。

真藤義雄という平壤日本語学校長になる人と共に朝鮮へ出発するにあたって、東亜同文会会長代理の長岡護美が与えた心得書の1項にこのようがあります。「其地方ノ状況ハ二週間毎ニ一回、必ス通信シ注意スヘキ出来事アル場合ハ臨時通信スヘキ事。但秘密ヲ要スル事項ハ別紙ニ認ムルヘシ」。これを見ると笹森と真藤にははっきりと現地調査の任務が与えられていたということが分かります。実際に、笹森だけでなく真藤も東亜同文会に筆繁く報告しておりますし、笹森が探検で不在の時にはその部下の助教たちも東亜同文会に頻繁に報告しています。ここに東亜同文会がなぜ旧韓国に日本語学校を開いたのかという目的の1つが

見えてくると思います。それは東亜同文会以外による日語学校との関係にも表れています。

旧韓国には、東亜同文会が学校を開く以前から幾つかの日語学校がありました。まず大日本海外教育会。これは明治27年東北学院長の押川方義という人と、東京英和学校（現在の青山学院）校主の本多庸一が中心になって組織したキリスト教系の団体ですが、東亜同文会より2年早い明治29年4月に、京城（現在のソウル）に京城学堂を開設しました。それから明治32年5月には全羅北道の全州に三南学堂を設置しています。ちょうど笹森と真藤が朝鮮に渡る頃です。大日本海外教育会他に韓南学堂、これは明治31年10月に薬師寺知臈という人が、仁川領事の石井菊次郎ら同地の居留日本人有志の援助を受けて忠清南道の江景浦に設置した学校です。それから韓語学舎。これは佐賀県の寺の住職で奥村円心という人が釜山に東本願寺別院を開き、翌明治11年に日本語を教える学舎を創立しました。さらに奥村の妹の五百子という人が、はっきりとはしていませんが、おそらく明治21年に日本語教育を行なう光州実業学校を開いた。さらに達城学校というのが大邱の前警務官補張圭遠の主唱により明治32年7月、地元有志の拠出金で学校が開かれております。開いたのは韓国の方ですけれども、事実上の経営者は藤付益吉という日本人だったそうです。

それらの関係で言いますと、東亜同文会が結成されたあとの明治32年早々に大日本海外教育会は、東亜同文会が行おうとしていた韓国の教育事業を引き受けたいという申し出をしております。その年の3月16日の『近衛篤磨日記』によりますと、近衛は「いいんじゃないか」と承諾をしております。けれども外務大臣青木周蔵（後に東亜同文会会長）が反対しました。「天津ノ国聞報、京城ノ漢城新報、京城学堂等ノ事業ハ同文会ニ引継タシトノ説」でした。これは、実は外務省の東亜同文会への補助金問題が絡んでいて、ご存じの方もいるかと思いますが、外務省は東亜同文

会の朝鮮での教育事業のために4万円を補助することになるわけです。補助する代わりに東亜同文会が独自で学校教育事業をやりなさいという意見だったということになります。その結果、京城学堂に東亜同文会が毎年1,200円の補助をして、その他の学校については独自で開設することになります。

本多庸一と近衛篤磨は相談して、南北を分担する、つまり今まで学校がすでにあるところについては大日本海外教育会にお任せしますということに決めます。結果的に東亜同文会は朝鮮の北部を担当することになります。ではなぜ東亜同文会が大金を注ぎ込んで朝鮮で教育活動を行なうのかという理由について、これは東亜同文会報告に出ていますけれども、近衛篤磨は「支那は地方が富裕であるから新聞・学校等の事業はこちらから資金を提供しなくても困窮しない。地方人と結んで自奮を促す方針をとり、直接の事業は既設のものに補助するに止め、そのあと必要により同文滙報及び南京同文書院を新設することとした。朝鮮はこれに反して地方が貧乏でその富力に頼ることができないから、朝鮮部の事業はたいてい本会の独力経営にする」、こう述べています。

北部のうち平壤学堂を真藤が担当し、咸鏡道（日本海沿岸の、今の北朝鮮の一番右上の辺り）を笹森が担当することになった。どうしてそういう分担にしたのかという理由がちょっと興味深いんですけれども、当時の咸鏡道がどういう地域だったかを考えればおおよその推測がつくのではないかと思います。それは先ほどもちょっと出ましたが、咸鏡道がロシア・中国の国境地帯で大変辺鄙なところだったということがあると思います。当初東亜同文会は咸鏡道の中でも中心都市の北青に学校を設ける方針だったんですが、笹森が現地に着いて調査した結果、あまり適当でないと分かりました。外交史料館の『東亜同文会関係雑纂』に、「校長笹森儀助ノ実地調査ニ依リ北青ノ人情頑強驕慢ニシテ学校設立ニ適セス。却テ城津ハ醇朴質実ノ

風アリ、且ツ新火以降地ニテ日本語ノ必要ヲ感ズルガ故ニ一般土民ノ学校ニ対スル感覚モ深く、且ツ新開港場ニ日本語学校ヲ設クルハ彼我ノ親交上カラ少カラサル益アルヲ発見シタルヲ以テ之レニ更エリ」とあります。要するに新開港場の方がいいのだということですね。

咸鏡道というのは、皆さんが時々耳するのは、テポドンの発射場じゃないかと思います。原子力施設もあったりします。そういうものがある所はだいたい田舎ということになっているわけで、ましてや明治30年代にどうだったかは推して知るべしということになります。東亜同文会はもちろん、咸鏡道がどういう所なのかほとんど知らなかったんじゃないかと思います。さらに外務省もほとんど情報を持っていなかったと思われまます。だからこそ測量などを盛んにしていた。南下を急ぐロシアへの対策は当時の日本にとって最も重大な懸案で、ロシア・中国と国境を接する咸鏡道は日本にとってロシアの防波堤とも言えるような場所でした。もしロシアが南下を開始すると最前線になる可能性が高いわけです。実際にそうなりますけれども。そういう軍事上極めて重要な所でした。ところが地理的な情報すらほとんど無い。したがって咸鏡道の実情に関する情報は、外務省にとっても喉から手が出るほど欲しいものだったはずで、外務省が東亜同文会に外務省機密費の実に半分に当たる補助金4万円もの大金を出した目的は何か、これは皆さんすぐにご想像がつくかと思いますが。ではそういう所に学校を開くにはどういう人物がふさわしいか、なぜ陸羯南が笹森という人を推薦したのか、これも皆さんだいたい見えてくるのではないかと思います。

ちょっと話を変えまして、弘前藩とロシアの関係について申し上げたいと思います。弘前藩に限らず下北半島も含めて、青森県は古くから蝦夷地との関係が非常に深い場所で、中世の安藤氏は十三湊を根城にして蝦夷地（最近の研究ではさらにもっと北の方まで）と交易していて、それによっ

て巨万の富を築いたと言われていています。最近も非常に立派な宮殿跡が見つかったばかりです。また蝦夷地には津軽半島や下北半島からたくさんの漁業者が行っておりまして、ロシアで最初に作られた日本語の辞書は下北の漂流漁師の三之助という人が書いています。私もちらっと見たことがあるんですけども、下北訛りがそのまま入っていてとても面白い辞典でした。それは余談ですけれども、1799年（寛政11年）に幕府は東蝦夷地を直轄領として、その警備に盛岡南部藩と弘前藩を当てます。19世紀に入ってロシアの南下圧力が強まってきましたと、その警備の負担も非常に重くなるので、見返りに弘前藩は7万石から10万石に高直りします。そういったことで弘前藩は非常に警備に苦勞するわけです。ちょっと横道に逸れますが、宗谷岬に行くとコーヒー豆をかたどった記念碑があります。ご覧になった方いるでしょうか。当時ビタミン不足による脚気で弘前藩士が次々に死亡したために、予防薬としてコーヒー豆を支給したという逸話に基づいたものです。1807年（文化4年）の択捉（エトロフ）事件の時にも弘前藩は多数の犠牲者を出していて、そのお墓が松前にあります。19世紀初頭になると弘前藩領沿岸にロシアの船が実際に南下してくるようになってきます。そこで藩主の津軽承昭は軍艦や大砲の建造を急がせるわけです。そういう土地柄に生まれ育った弘前藩士というのはみんな非常にロシアへの意識が強いわけです。藩が潰れるか、自分がいつ戦争に行くかということに関わってきますので当然の話ですけれども。陸羯南も新聞『日本』に、「日本の一大問題はロシアの南下である」ということをたびたび書いていますし、彼がいわゆる対外硬派の中心になったのも津軽の土地柄と無縁ではないわけです。

笹森という人がただの冒険家ではないと申し上げたのは、実は笹森は陸羯南と思想的にはほとんど表裏一体のような人でした。探検に行ったのも国防など対外問題をどうするかという視点がまず



第一にある。だから千島の端っこや沖縄の方まで行ったり、台湾にも行っているんですけども、そういう人ですからただの冒険家ではない。いわゆる植村直己さんのように危険を求めて行くというのではないわけです。分かり易く言うと「憂国の士」であったわけです。探検といっても、どういう人が、どういう思想、どういう視点で行って、何を調べるかによって丸っきり違ってきます。その意味において先ほど申し上げた、情報がほとんどない咸鏡道を笹森が調査して何がいかと言えば、もちろんありとあらゆる苦難を乗り越えて何でもやり遂げてしまう笹森の意志力の他に、調査能力はもちろん、どういう思想を持っている人であるかというのがとても重要だということになります。そこで、笹森儀助という人の思想を知り尽くしている陸羯南であれば、当然のように笹森を選ぶということだったのだと思います。

さてこれは有名な話ですけども、最初東亜同文会の明治31年の「発会決議」では「支那を保全す」とだけあって、朝鮮は入ってなかったんですが、翌1899年11月の「綱領」には「支那及朝鮮の改善を助成す」「支那及朝鮮の時事を討究し実行を期す」「国論を喚起す」と、突然に朝鮮が登場します。それは1900年（明治33年）2月の『近衛篤磨日記』に、佐々友房、長岡護美、清浦圭吾らが外務省機密費の獲得に走り回ったという記述が頻繁に登場することから、佐々らの働きがあったということが明らかなのです。佐々友房は有名な熊本の国権党を開いた人ですけども、この人は実は明治14年からもう熊本で朝鮮語教育にタッチしています。その2年前に熊本に同心学舎というのを開校して、これは明治15年に済済費になるわけですけども、佐々の進言を受けて熊本県庁が明治29年に県費留学生を朝鮮に送るようになります。これは1期3年で第5期まで11年間にわたり、県費留学生を朝鮮に派遣します。その第1期生で監督に当たったのが実は真藤義雄、後の平壤学校長です。第1期生の生徒は6

人いたんですがそのうちの2人、村上三男と佐伯達は笹森儀助の下で城津学堂の助教を務めることになります。さらに隈部一男、松田辰尾の2人は平壤日語学校の教師になった。こういうふうに関わっているわけです。

ちょっと時間がないので端折ってしまいますが、実は熊本と津軽というのは非常に深い関係にあります。たとえば最後の弘前藩主津軽承昭という人は細川の生まれです。津軽藩に嫡子がなかったので養子に行っている。それで、これも長く話している時間はありませんけれども、津軽家の宗家が近衛家です。近衛家を核として津軽家と熊本は非常に深くつながっていたのです。山田兄弟は陸羯南のアドバイスで中国に関わることになりましたけれども、そういったことを含め、なぜ東亜同文会に弘前の人々がたくさん関係しているか。これを話すだけで30分ぐらいかかってしまうので、残念ながら今日は割愛させていただきますけれども、少なくとも一つだけ言っておかなくてはいけないのは、津軽承昭という、開明的で進歩的で有名なお国柄、分かり易く言うとハイカラ志向の土地柄の熊本の人が弘前藩主になった。その人が明治維新の時、慶応義塾や横浜、浜松、鹿児島島の西郷隆盛の学校などに留学生を出しました。津軽という東北の片田舎の藩は、学問がなくてはとて生き残れないと考えて留学生を出した。その留学生の中に本多庸一（青山学院の院長になる人です）がいた。この人は笹森の家から40mぐらいしか離れていないところで生まれました。山田の家も陸羯南の家も全部弘前の在府町の中にあるというすごい町内ですけども、この本多庸一や、弊社東奥日報を起こした菊池九郎、そういう人達が国内留学をして帰ってきて承昭の考えを踏襲し、学制の開始によって旧藩校を潰すわけにいかないので東奥義塾という私立の学校を作ります。そこに津軽承昭が莫大なお金を支援して、東奥義塾はジョン・イングなどの米国人教師らを招くわ

けです。その洋学から自由民権運動が発達して、東北の片田舎でありながら、弘前は日本でも極めて特異的な自由民権運動、キリスト教運動の中心舞台になっていくわけです。

そういった極めて進歩的な土地柄が山田兄弟とか、国内外に雄飛するたくさんの人材を輩出した重要な要素になっている。したがって熊本から名君と言われている津軽承昭が来なかったら、おそらく東亜同文会との関係もなかっただろうし、弘前は今は学都と呼ばれていますけれども、教育熱心な土地柄にはならなかっただろうと思っています。

ご存じのように東亜同文会と熊本の関係は非常に深いものがあります。その熊本と近衛も長く深い関係にあり、さらに津軽も近衛家と近いということで、三者が東亜同文会に深く関わっているわけです。朝鮮における東亜同文会の教育活動を、もう一度その三者の人脈から考えていくのも面白いかと思います。

笹森は生涯、津軽弁という日本人でも分かりにくい方言を話した人でしたが、朝鮮に日本語学校を開くと言っても全く朝鮮語ができない。ほとんど探検に明け暮れていたのも、熊本県の県費留学生だった部下がいなければとても学校は開けなかったと思います。ただ笹森の名誉のために言うと、笹森の最大の武器はその人格・人間的魅力と、類まれな実践力にありました。笹森書簡集にある佐伯や村上、あるいは学僕の内田万人（これも熊本出身の人です）の書簡を読むと、彼らがいかに笹森を尊敬し、頼りきっていたかということが本当にひしひしと感じられます。ちなみに、笹森はどこに行ってもそうなわけで、下北の大区長をしている時も、奄美の島司をしている時も、部下がものすごく敬愛する。たとえば奄美の島司を辞める時には、奄美の部下達が皆でお金を出し合って大島紬を贈ったりしています。農牧社という牧場をやってる時も部下の一人に外崎嘉七という人がいて、この人は後に「リンゴの神様」と呼ばれ

ますが、その神様が「私の神様は笹森儀助だ」と言って、毎年秋になると千島探検の時の笹森を描いた掛軸をかけ、御神酒を捧げる。それを現在も青森県りんご協会が「りんご祭」として引き継いでいる。それぐらい人を魅了する力があつたわけでございます。

では実際にどういう教育を行なったのかということについて言いますと、修身・語学・読書・書取・習字・作文・算術・地理・歴史・美学という、要するに日本語の読み書きを中心とする学問だったわけです。東亜同文会としては中等以上の教育を施そうという方針でしたが、実際には12歳ですから小学生から引き受けています。それは先ほど申し上げたように大変田舎でございまして、それでなくとも当時の韓国では学校制度がほとんど整っておりませんでした。一応公立学校はあったのですが、笹森の報告によると、鏡城という、後に学校を移転しようとした所の子供を視察した結果、公立学校5校で出席率は半分ぐらいだったそうです。しかもまともな教育をしているのは公立学校ではなく、地元が一番の名士が富裕層の子供だけを30人ぐらい集めてやっている学校でした。笹森は勉強を奨励するために公立学校の子供達に紙などをプレゼントし、学校に来るようにと励ましたりする場面もあつたわけです。

そういう所でしたので、同文書院と最も違うのはここだと思えますけれども、東亜同文会の学校というのは地元にとってみればモデル学校という役割が非常に大きいわけです。公立学校が駄目なものですから。たとえば城津学堂は新開港場であまり日本人が増えず、発展しないから、城津を捨てて鏡城というもうちょっと大きい町に学校を移そうとするわけです。これは実現しませんでした。ロシアの南下によって大量の難民が押し寄せてきて、とても学校開設どころではなくなったからです。その、学校を移そうとしたとき、城津の地元の役人代表が「何とか出ていかなくてくれ」と頼むわけです。逆に鏡城ではなかなか学校を開

設できない困難な状況にあって、笹森が激怒して「学校開設に協力しないならもう城津に帰る」と鏡城の監察史（地方役人の長）に言うと、監察史は大慌てで、「いや今度は何とか協力するからどうかここにも学校を作ってくれ」と懇願される。そういう状況でした。したがって現在の北朝鮮における東亜同文会の日語学校が地元にとってどういう役割を果たしたかというのは、中国とは違ってもっと根底的なもの、ほとんど教育というものが無いところに教育をもたらしたというのが大きな特徴だと思います。

東亜同文会は日本の精神・文化を伝えるという役割もありましたので、面白いことを一つ付け加えますと、笹森が去った後の話ですが、学校に通うのに都合がいいように寄宿舎を設けた。寄宿する人はかなりの数にのぼり、お風呂に入れたら、今まで全くお風呂に入る習慣がなくて、すったもんだの弥次喜多式の大騒ぎを繰り広げた、という記述が東亜同文会の報告に出てまいります。その後、日露戦争等で一時教育活動が中断したりするんですが、最後に朝鮮に統監府が設けられて本格的に日本の統治が始まると、東亜同文会の日語学校は統監府による模範学校的な教育活動に吸収されていくということになります。ただ実際には城津も平壤日語学校も、校長の肩書きは変わりましたがそのまま校長的な立場で教育を続けておりますので、吸収されたと言うよりは東亜同文会による教育が模範学校のさらにモデル校のような役割を果たしたということになろうかと思えます。それからもう一つ付け加えると、たとえば城津学堂の卒業生は城津学堂の先生にもなっておりますし、城津学堂の卒業生がその後統監府によって次々に作られる学校の教師・通訳その他にたくさん就職しているということで、城津学堂が師範学校の役割を果たした。これは決して小さくないと考えています。

大急ぎで雑駁な話になってしまいました。ご清聴ありがとうございました。

【座長】 松田先生どうも大変ありがとうございました。われわれといたしましては笹森儀助を通して直接城津学堂のお話を聞けると思っておりましたけれども、それを上回って津軽藩から熊本まで出てきました。そういう意味で言いますと津軽人脈の東亜同文会との関係等、いろいろ刺激的なお話をいただきまして、私もメモをとるのが忙しかったほどです。大変ありがとうございました。どなたかご質問はございませんか。はいどうぞ。

【渡辺】 中国における日本教育は三民主義のナショナリズムの煽りと、儒教に対する反発が強くて難航したようですが、朝鮮の場合はどうでしょうか。修身を主体にしておりますが、儒教国家ですからそれはスムーズにいったんでしょうか。それとも一つ、西洋の近代科学に全然触れたことのない朝鮮民族に、明治の初めにそういう理科教育を進めていくことは順調にいったんでしょうか。何か示唆して下さることがあればお願いいたします。

【松田】 実際に教育内容が朝鮮の人々にどう受けとめられたかという記録がないので、これははっきりと分かりません。ただ先ほどちょっと申し上げましたけれども、地元の方々の日語学校に対する期待というのが、少なくとも咸鏡道においては非常に強いものがあつた。地元の公立学校よりも先を争ってそこに願書を出すという状況でしたので、比較的田舎のせいで却って日本人への反発というのは強くなかったのかも知れません。ただ反発が全く無かつたわけではなくて、統監府ができて日本の教育方式が韓国中に広げられていくと、教育だけじゃなくて全てに対する抗日運動が非常に強くなりますけれども、その中で日語学校に対する反対運動も起きたようです。ただし私はそのところまではまだよく調べたことがないので、ちょっとお答えし難いです。

【渡辺】 近代科学というものに対して閉鎖的と言いますか、全く経験がなかった朝鮮半島に教育を持っていくにしても、糸口が非常に困難であったと思われます。それに対して指導者達はどのようなことをしたんでしょうか。

【松田】 ちょっと触れましたけれども、最初に東亜同文会が学校を置こうとした北青を笹森が不適地と判断した理由の一つは、日本人に対する感情があまり良くないと。北青は咸鏡道の中では大きい町でしたので、大きい町ではそういうことが

あったかも知れません。ただ田舎のほうに行きますとそれこそ風呂にも入ったことがないという場所で、そのレベルまではたぶん考えたことのある人もいなかったのではないかと思います。トラ狩りもしなくてはならないというぐらい、本当の田舎でしたので。適切なお答えになっていないようで申し訳ないんですが、そんなところです。

【座長】 どうもありがとうございました。2時間続けましたのでここで少し休憩を5分ほどとらせていただきます。よろしく願いいたします。

笹森儀助略年表（青森県立郷土館「辺境からのまなざし 笹森儀助展」図録より）

元号	西暦	内 容	日本・世界の動向
弘化 2. 1.25	1845. 3. 3	弘前藩御目付役笹森重吉の子として弘前在府町に生まれる。	幕府、オランダに開国拒絶
安政 4. 6. 4	1857. 7.24	父重吉死去。儀助、父の家祿（150石）を継ぎ、小姓組となる。	米総領事ハリス、將軍に謁見
文久 3	1863	母ひさ死去。	長州藩、下関海峡の外国船攻撃
慶応 3.11	1867.12	師山田登の国政改革意見を弘前藩主に具申して塾居を命ぜられ、家祿100石を削減される。後、明治維新の大赦により許される。	朝廷、王政復古を宣言 パリで革命。共和制宣言
明治 3. 9	1870. 9	弘前藩庁において権少属租税係に任命される。	日清修好条規を調印
明治 4. 7.14	1871. 8.29	廃藩置県の詔書で。弘前藩は弘前県となる。儀助、弘前県の役人となる。	華士族・平民の職業選択自由
〃 4.12. 1	1872. 1.10	青森県庁の移転完了。開庁式挙行、以後、儀助は大区副区長、学田係、地租改正掛等を歴任。	佐賀の乱・台湾出兵
〃 7. 3.20	1874	儀助、県庁を辞し、西浜（鯉ヶ沢）において隠遁する。	参議大久保利通暗殺される いわゆる3新法制定
〃 11.10.30	1878	中津軽郡長に任命される。	金禄公債証券発行開始
〃 13. 1	〃	農事研究のため、函館七重の農場に研究生を入場させる。	
〃 13. 6	〃	青森県勸業課長尾介一郎を伴って常盤野に至り、地勢を調査。	北海道開拓使払い下げ問題おこる
〃 13. 7	〃	大道寺繁禎・芹川高正・菊池九郎らと連署の上、常盤野の土地拝借願いを青森県に提出する。	板垣退助、自由党を結党
〃 14. 6.17	1881	儀助、明治天皇の東北・北海道の御巡幸に際し、弘前方面への御巡幸を山県参議、佐々木高行枢密院副議長らに請願。	
〃 14.11.25	〃	弘前事件により中津軽郡長を辞任。	開拓使廃止。函館・札幌・根室三県を置く
〃 15. 2.18	1882	政府より農牧社起業拝借金 18,000円貸与の指令出る。	伊藤博文、立憲政友会結成
〃 15. 3. 1	〃	農牧社の仮事務所を弘前本町2丁目34番地の第五十九銀行内に開設する。	朝鮮京城で反日暴動（壬午事変）
〃 15. 5.24	〃	農牧社開業。社長大道寺繁禎、副社長笹森儀助。	群馬事件・加波山事件・秩父事件等続発
〃 17. 8	1884	家族6人を弘前より常盤野に移転させる。	
〃 19. 1	1886	農牧社の総会開催。役員改選の結果、社長大道寺繁禎、副社長兼場長笹森儀助再任となる。	北海道庁設置。函館・札幌・根室三県廃止
〃 19. 4	〃	東京牛乳売捌出張店開設の件可決。	
〃 19.12	〃	儀助、上京。東京芝の西応寺町60番地に農牧社東京牛乳売捌出張店開設。	英国汽船ノルマントン号事件起きる
〃 23.11.29	1890	儀助、農牧社の総会において、本社の事業を中畑清八郎に託し、自ら3年間東京牛乳売捌出張店勤務を申し出て可決される。	
〃 24. 4. 5	1891	第1回帝國議院を傍聴。のち、傍聴を断つ。	アフリカ分割に関する英米協議なる
〃 24. 8	〃	「貧旅行」実施。4月5日東京出発。横浜より駿河丸に乗船し、伊勢に参詣。のち、伊賀・大和・摂津・備前。芸州・福岡・熊本・鹿児島に至り、大隅の国に出て、日向の細島港より汽船で神戸に渡り、それより大阪・京都・名古屋を経て6月13日、東京帰着。この年、「貧旅行之記」を書く。	保安条例により壮士54人東京退去処分
〃 25. 6. 5	1892	儀助、再度、農牧社あてに社長辞任の願ひ提出。中畑清八郎が社長となる。	ロシア皇太子、大津で襲撃される (大津事件)
〃 25. 6.22	〃	千島探検の件につき、政府の許可を得る。	第二回総選挙に際して選挙大干渉起きる
〃 25. 6.24	〃	弘前を出発し、同日軍艦磐城に乗艦、千島探検に向かう。	
〃 25. 7. 5	〃	軍艦磐城、函館に入港。同地にて千島諸島の資料調査を行う。	「万朝報」刊
〃 25. 8. 1	〃	儀助、磐城に乗船。厚岸～根室において調査を行う。	
〃 25. 8. 6	〃	磐城、択捉島紗那郡の留別港に入港。儀助、同地の調査を行う。	
〃 25. 8.18	〃	磐城、ホロモシリ島乙女港に入港。儀助、同地の調査を行う。	
〃 25. 8.28	〃	儀助、占守島に露宿。	
〃 25. 8.31	〃	磐城の石炭や食料が欠乏。特に食糧は9月6日分までという状態になり帰航の途につく。	
〃 25. 9. 1	〃	磐城、択捉島のスペトロ港に入港。儀助、同地の調査を行う。	
〃 25. 9. 3	〃	磐城、紗那に入港。儀助、同地の調査を行う。	
〃 26. 2.10	1893	磐城、根室に入港。儀助、艦と別れる。（後、儀助はその時北海道を巡視中であった土方宮内大臣に同行するために釧路に赴き、上川・札幌を巡視して大臣と別れ、室蘭に出、ここから郷里弘前に向かう。弘前着は10月15日）	
〃 26. 5.10	〃	儀助、東京京橋区の恵愛堂より「千島探検」一巻を発行し、明治天皇に奏上する。また千島探検の結果を内務大臣井上馨に報告。	郡司成忠大尉、千島探検に出る
〃 26. 5.11	〃	儀助、琉球諸島探検のため、弘前出発。	文部省、「君が代」を制定
〃 26. 5.11	〃	儀助、青森より乗車。12日、東京着。探検に必要な調査や準備に追われる。汽船陸奥丸に乗船して神戸・鹿児島・大島の名瀬の各港を経て、6月1日、那覇に入港。	
〃 26. 6	〃	同地に2週間滞在し、那覇を中心に、首里及びその付近を調査する。	
〃 26. 6.17	〃	儀助、名護番所を出発し、名護・羽地・大宜味。国頭・久志の五間切、その村々30余を調査し、24日、名護番所に帰着。25日、那覇に戻る。	
〃 26. 6.26	〃	儀助、7月4日まで那覇に滞在。無人島・琉球の歴史を調査。国道新設の必要性を説く。	
〃 26. 7. 5	〃	儀助、汽船大有丸に乗船し、6日、宮古島の瀬水港に入港。同地を調査。	
〃 26. 7. 8	〃	儀助、瀬水港出港。八重山石垣島の石垣港に入港。14日まで、甘蔗、唐芋、製糖など、産物の調査をする。	
〃 26. 7.15	〃	儀助、伝馬船に乗り、西表島の租納村西表番所に投宿。28日まで同地に滞在し、租納村・千立村・浦内村・上原村・高那村・古見村・仲間村、その他、本村・枝村合計15ヶ村、外に鳩間島を加えて西表島全島を調査。	

元号	西暦	内 容	日本・世界の動向
〃	26. 8. 1	1893 儀助、舟浮港出港。与那国湾に入港。同地に2日間滞在し、調査。	
〃	26. 8. 3	〃 儀助、与那国出港。4日、石垣港に入港。このころ、毒虫に刺された足脛の激痛と感冒に悩まされる。24日まで同島に滞在し、12日より馬にて全島調査。さらに、機那珈琲・甘蔗・糖業等の状況、吏員・出張医の状況、土人の風土病予防並びに治療法、水田反別耕作状況、牧場の必要性、八重山群島新拓殖見込地、言語等の調査をする。	
明治	26. 8. 24	〃 儀助、石垣島を出港。25日、宮古島瀬水港に入港。	
〃	26. 8. 27	〃 儀助、宮古島出港。28日、那覇港に入港。	
〃	26. 9. 12	〃 儀助、国頭北部を調査し、20日、那覇に帰着。	
〃	26. 9. 28	〃 儀助、朝日丸に乗船し、大島群島中の与論島・沖永良部島を経て30日、名瀬港に入港。10月16日まで同地に滞在し、産業・経済・政治・教育等を調査する。	
〃	26. 10. 17	〃 儀助、汽船尾張丸に乗船し、名瀬港出港。鹿児島を経て、20日、神戸港に入港。	
〃	26. 10. 24	〃 儀助、神戸を出港し、横浜入港。直ちに上京し、陸羯南、桜田大我らの知己と久しぶりに歓談。	
〃	26. 11. 5	〃 儀助、東京を出発し、6日、青森到着。青森県庁や山林局に帰島の報告をし、8日弘前帰着。	
〃	27. 5. 31	1894 儀助、「南島探験」発刊。	朝鮮で東学党の乱起きる
〃	27. 5	〃 儀助、政府に「沖縄県下八重山島風土病ノ状況並駆除方法意見」を提出。	日本・中国ともに出兵。日清戦争となる
〃	27. 6. 2	〃 儀助、羯南の計らいで中村十作と初めて会い、「南島探験」2冊を贈呈する。	北里柴三郎、ベスト血清発見
〃	27. 8. 23	〃 儀助、「南島探験」の発刊が機縁となり、奄美大島々司に任命される(高等官七等)。次女つるを伴って赴任。	
〃	28. 4. 27	1895 儀助、大島を出港して鹿児島に出、5月2日まで同地に滞在し、川辺十島巡回調査の準備をする。	下関で講和会議
〃	28. 5. 3	〃 儀助、鹿児島を出港して、4日、川辺郡東南方村に至り、10日まで同地に滞在し調査。	独・露・仏、日本に対し三国干渉
〃	28. 5. 11	〃 儀助、杖崎を出港して竹島に渡り、13日まで同地に滞在し調査。以後硫黄島(5月14日～19日)、黒島(5月20日～27日)を調査。	日本陸軍が朝鮮でクーデター。閔妃を殺害
〃	28. 5. 28	〃 儀助、黒島を出港して、29日、口之永良部島に渡る。31日、口之島到着。6月3日まで同地に滞在し調査。	日本、台湾に軍政を敷く。台湾人民これに蜂起
〃	28. 6. 4	〃 儀助、口之島を出港して中之島に渡り、17日まで同地に滞在し調査。以後、臥蛇島・平島・諏訪瀬島・悪石島・宝島に滞在、それぞれの島を調査。	
〃	28	〃 この年、儀助の「拾島状況録」成る。	
〃	29. 3. 25	1896 儀助、台湾調査のため大島の名瀬港出港。鹿児島・米之津川・松橋・博多・門司・下関を経て、4月3日、五島沖を通過し、5日、基隆に到着。同地に滞在し、調査。	混成第7旅団、台湾征伐に出発
〃	29. 4. 7	〃 儀助、台北到着。同地に滞在し、調査。更に進んで桃仔園・新竹・中港・大甲・苑里街等を経て19日台中到着。	韓国で親日派政権打倒される 三陸地方に大津波
〃	29. 4. 26	〃 儀助、土城仔を出発して彰化県庁に到着。以後台南を調査し、基隆を経て台北に到着。儀助、大島に帰る。(5月15日)	
〃	29. 5	〃 儀助、「台湾視察論」稿本を拓殖務省大臣子爵高島勲の助あて提出。	
〃	29. 8	〃 儀助、昨28年に川辺十島を巡回調査した際に、諏訪瀬島において談合した同島開拓の恩人藤井富伝の略伝を書き、鹿児島県知事子爵加納久宜の序文を附して刊行する。	
〃	29. 9. 30	〃 儀助、大島で蒐集した資料72点を帝国博物館に寄贈。	
〃	29	〃 この年、儀助、正七位高等官六等に除せられ、西郷隆盛遺跡記念碑建設運動を起す。	
〃	31. 8. 29	1898 儀助、大島々司辞任。	清の戊戌変法
〃	32. 5	1899 儀助、陸羯南の推挙によって東亜同文会の囑託となり、学堂(日本語学校)開設のため韓国北部の咸鏡道に渡る。	清、ロシアに遼東半島を租借
〃	32. 8. 7	〃 儀助、軍艦摩耶に乗船し、10日間、咸鏡道北関地方を巡回視察。	清で義和團事変勃発
〃	32. 9	〃 約20日間、シベリア旅行。ハバロフスクに至るまでの沿岸を調査し、「西伯利亚旅行記」を書く。	フランスが広州湾を租借
〃	32. 10. 9	〃 儀助、11月12日まで、咸鏡道北関地方及び露清境3国境界線の状況を巡回視察。	
〃	32	〃 この年の暮れ、城津に東亜同文会の学堂開設。儀助、堂長となる。	
〃	33. 5	1900 東亜同文会は学堂を咸鏡道の首府鏡城に移転することに内定。5月下旬、儀助、実地調査のため鏡城に赴く。	清の義和團、華北一帯に拡大
〃	33. 8. 15	〃 吉州党と城津人民との間に紛争起こる。翌16日、儀助、学僕をつれて鏡城に向かう。	清、日本を含む列強に宣戦布告
〃	33. 9	〃 下旬、学堂を鏡城に移転。城津には学堂分校を設置する。	日本、軍隊2万2000を派遣
〃	33. 10. 15	〃 儀助、北韓各地からボシエツト・耶春を巡回し、暴徒の状況を視察。	
〃	34. 4. 22	1901 東亜同文会幹事会にて、城津の学堂を継続し、鏡城の学堂を廃止することに決定。これにより儀助帰国する。(6月)	北清事変の講和なる
〃	35. 5. 6	1902 儀助、青森市の第2代市長となる(初代市長工藤草蘭の推挙による)	弘前の歩兵第五連隊、八甲田で遭難
〃	35. 7. 23	〃 儀助が主催者となって、八甲田山麓田茂木野において歩兵第五連隊第二大隊遭難者の慰霊祭を執行する。	シベリア鉄道完成
〃	35. 10. 1	〃 儀助の提唱した青森商業補習学校(夜学校)開校式挙行。生徒数約70名。儀助、初代校長兼務。	小学校令改正。国定教科書制となる
〃	36. 3	1903 儀助、内務大臣あてに青森市の水道敷設許可を出願する。	「万朝報」変節し対露主戦論
〃	36. 12. 13	〃 儀助、青森市長辞任の願書提出。16日、辞任。	幸徳秋水ら辞職
〃	36. 7. 23	〃 儀助、弘前第五十九銀行監査役に就任。	
〃	41	1908 春、儀助、四女はまが奉職中の大阪の池田病院の会計監督係となる。	西園寺公望内閣総辞職
〃	41. 10. 2	〃 はま病死。11月11日、儀助、はまの遺骨を抱いて弘前に帰る。	ロンドン海軍軍縮会議
大正	4. 9. 29	1915 儀助、脳溢血により死去。	日本、対華21ヶ条要求